

飾り火

〔上〕

連城二紀彦

飾り火

[上]

連城三紀彦

著者紹介

連城三紀彦（れんじょう みきひこ）

本名 加藤甚吾。1948年1月11日愛知生まれ。早稲田大学卒。昭和59年、「恋文」にて第91回直木賞受賞。著書に、「戻り川心中」「宵待草夜情」「恋文」「花墮ちる」など。

かざ 飾 り 火 [上]

1989年4月15日 印刷

1989年4月30日 発行

著 者 れん じょう み き ひこ
連 城 三 紀 彦

編集人 沢 畠 毅

発行人 川 合 多喜夫

発行所 毎 日 新 聞 社

〒100-51 東京都千代田区一ツ橋

〒530 大阪市北区堂島

〒802 北九州市小倉北区紺屋町

〒450 名古屋市中村区名駅

印刷／精興社

製本／大口製本

© Mikihico Renjō, Printed in Japan 1989 <編集担当 石倉昌治>

ISBN 4-620-10386-1

飾り火〔上〕

目次

第一部

雪の誘い

5

真夏の蝶

58

薄紫の時間

152

発覚

247

飾
り
火
〔上〕

装
幀

村上
みどり

第一部

雪の誘い

やはりあの女が自分を手繰りよせようとしている——。

京都駅を出て十分もすると、車窓に溢れている冬の光の中に、白い塵が舞い始めた。それが雪片だとわかった時、藤家は胸の中でそう呟いた。やはり次の米原でこのひかり号を降り、北陸本線に乗り換えたほうがいい——。

昨夜京都のホテルで、取り引き先の社長が倒れたという連絡を電話で受けた時も、あの女と金沢の町が自分を呼んでいる気がした。本当なら、今夜はその社長を接待してもうひと晩京都に泊まるつもりだったのだが、それが突然キャンセルになったのである。受話器をおきながら、「ひと晩だけ金沢に寄ってみようか」そう思った。

もっともすぐに決心がついたわけではない。眠りに落ちるまで、ベッドの上で何度も寝返りを

打ちながら、東京に戻るか、金沢に寄るか、二つの道の間で気持ちは揺らぎ続けた。今朝、京都支社にもう一度顔を出し、倒れた社長を入院先に見舞って、まだ一時間前に京都駅で切符を買った際は、まっすぐ東京へ戻るほうを選んで、ひかり号の切符を買った。ひかり号に乗ってしまったえば米原は通過するし、北陸本線に乗り換えようかと迷わなくて済むはずだったが、乗りこんで間もなく車内アナウンスで、その列車が、米原駅にも停車することがわかったのだった。

「米原で北陸本線にお乗り換えの方は……」

アナウンスの声を聞きながら、二つめの偶然が自分を、金沢へ、あの女のもとへと手繰りよせているのだと藤家は思った。月に一度は東京・京都間を出張で往復しながら、米原にも停車するひかり号に乗り合わせたのは、これが初めてだった。

そして、三つめの偶然が、車窓の、二月とは思えない強すぎる陽ざしの中で、砂塵のように流れ、舞っている雪である。風で遠くから運ばれてきたのか、山並や田畑が光の流れにかき消された中で舞い狂う雪は、まぼろしのようにしか見えない。雪片はときどき窓ガラスにぶつかり、一瞬の雫となり、だがすぐに光に溶けて消えた。

金沢から、十年前のあのひと晩から運ばれてきたのかもしれない。

短い間、藤家は現実を失い、そんなことを思っていた。あの晩金沢の町には雪が降っていた。北陸の冬に雪は珍しくないのだが、あのひと晩のことを思いだすと、不思議にあの女と雪の白さとが重なって面影に滲みついてくる。

「私と、雪と、どちらが白いかしら」

抱きあつた後、女がそう呟いたせいかもしれない。そうひとり言のように呟き、女は布団を離

れると障子を開け、宿の庭に降りしいて雪へと片肌ぬぎになった肩を突きだし、「ねえ、どっちが白いかしら」と藤家呼んだ。庭の灯を浴びて、襟足から肩へ、ひとつなぎに白い肌があり降りかかった雪は肌に落ちきる間際にその白さに霞んで見えなくなった。白さは女の肌のほうが勝っていた。

「どのみちひと晩だけのことだし、今夜のことは誰にも言っちゃ駄目よ」

その前だったか後だったかに、女はそう言い、からかうように藤家の首すじへと息を吹きかけてきた。

驚くほど熱い息だった。

十年前のあの晩を思いだすと、何もかもが現実感がなく夢の中で見知らぬ女を抱いたような希薄な手応えしか記憶に残ってはいないのだが、不思議にあの時、冷えきった頬に唐突にふりかかってくる息の熱さと、実際雪と変わりなく白かった肌が、目には冷たく見えてもじつと手をあてているとその底のほうからにじみ出すように伝えてきたぬくもりだけは、生々しく思いだせる。

「北陸の雪は、奥深い底に赤い火が燃えているのよ」

確か女がそんなことを言った。

音もなく、ただ障子に影だけで流れる雪を眺めながら、布団の中で体を寄せあい、どんな話をしたか、もうそのほとんども忘れていた。はつきりと憶えているのは、その女がしきりに、「今夜のことは誰にも言っちゃ駄目よ」と念を押してきた言葉だけである。

一度はその言葉を、顔に覆いかぶさるようにして藤家の唇に自分の唇を押しあてたままで言った。熱い息にふくまれたその声は、暗くくぐもって、じかに唇から喉へと、さらに体の底の底へ

と流れこみ、しみこんでいった。

何かの呪文のように思え、雪女の伝説を思いだして、冗談半分にそのことを口にとすると、女もかすかに笑って、

「ともかく約束を守ってくればいいの、誰にも言わないって。そうしたら十年間だけあなたのことを忘れずにいてあげる……」

「どうして十年間？」

「——昔、初恋の男を忘れるのにちょうど十年かかったのよ。約束を守ってくれたら、あなたを二度めの初恋の男にしてあげる……」

謎めいた言葉だったが、それ以上訊き返さなかった。

もとより藤家はその女のことを誰にも言うつもりはなかった。十年前という勤め先の会社で課長に昇進した頃だったし、息子の雄介が中学に、娘の叶美かなみが小学校にあがって家庭も大きく実りかけていた時期である。東京一のホテルの展望レストランで子供二人の進学祝いを一緒にやった。妻との関係も大した波風もなくうまくいっていたし、何より、藤家に見れば、出張先でのひと晩だけの浮気のつもりだった。

女のほうもそのつもりだったはずである。女の言葉や仕草に見えたわざとらしい大袈裟な媚態も、相手がひと晩きりの男だからという気安さが女にあったからだろう。ひと晩だけだとわかっていたから、「十年間」という嘘くさい言葉も口にできたのだろう。そう思っていたし、東京に戻った藤家に残ったのは、ひと晩きりの浮気にしてはいい女を抱いたものだという、下卑げひた感慨だけだった。

その後、金沢を訪れていない。北陸方面の出張は若い社員に任せだし、金沢という町の名を聞けば、さすがにふつと蘇るよみがえるものはあつたが、もう二度と逢うこともないだろう、漠然とそう思っていた。それが去年の暮れごろから、無性にもう一度だけでいいから、雪に塗りこめられた北の城下町の底のない静寂の中であの女を抱いてみたい、そんな衝動が体を疼うずかせるようになった。理由は自分でも説明がつかない。冗談として聞いただけの十年という言葉を、四十六歳の体がふつと真実だと思いたがつていた。

車窓を流れる光の風が、あの晩の女の息であり、つかの間の幻のように舞い狂っている雪片が、「十年間だけ忘れずにいてあげる」そう呟いた女の声の破片のようにも思えた。

あの晩が正確には何日だったかはもう憶えていないが、二月の末だったことは間違いない。それがおよそ半月後に迫り、あの女のほうでも約束の十年が果てるその日までにもう一度、ひと晩きりの、通りすぎりにも似た男が現われるのを待っていてくれそうな気がする。

もつともそれは、自分の願望をその女を鏡にして映しだしているだけかもしれない。

車窓の雪は数秒舞っただけで、短いトンネルを一つ越して窓から陽の光が遠のくと同時に消えていた。車窓には冬の生暖そうな陽ざしに平たく均なされた田畑が広がっているだけで、雪は遠い山並の頂きを薄く覆っているだけである。

あんな遠くから風で運ばれてきたとは思えない。今見た雪の舞いは幻影でしかなかったような気がし、藤家はまた自信を失くした。

十年ぶりにひよっこ訪ねていっても、あの女はもう藤家の顔やあの晩のことなど忘れてしまっているかもしれない。藤家のほうでも一晩の女の顔はもう確かな輪郭では蘇よつてこない。はっ

きりと思いだせるのは雪よりも柔らかく見えたその肌の白さだけだったが、それも記憶を美化しているのかもしれない。

改めて考えてみると、思い出しみついて残っている白さは、現実の女のものと思えない。歳月の流れで濾過^{ろか}し、あの晩のいちばん美しかったものを實際以上の美しさで抽出し、記憶に残しただけなのかもしれない。それにあの女が金沢の西廓のはずれで、今もまだあのカウンターだけの小さな料理屋をやっている保証もないのだ。

たとえまだやっていたとしても、十年前の晩、雪に迷ったように偶然立ち寄った一人の客のことなど、気まぐれのように宿までついていつて抱きあった一人の男のことなど、もうどうでもよいかもしれないし、たとえまたよく憶えていてくれたとしても、女に十年前と同じ美しさが残っているかどうか。

この十年のうちに藤家はさらに部長に昇進し、肥って貫禄もついたが、そのぶん若さは十年前の半分に削られてしまっている。正確な年齢を聞かなかったはずだが、あの頃、女は藤家と同じ三十代後半だっただろう、女としては盛りのぎりぎりの美しさだったような気がする。とすればすべてが首尾よくいつて、今夜あの女と再び宿の一室に閉じこめることになっても、欲望を十年前のあの晩に繋ぐ^{つな}だけの若さが、あの肌に残っているだろうか。

列車が米原駅に到着し、客が乗りこんでいても、藤家はまだまだためらっていた。ドタン場での決断は早かったし、それが何より会社での今日の地位を築きあげたものだったが、一人の女のことでもうもぎりぎりまで迷っている自分もどかしかった。このまま寄り道せずにはまっすぐ、東京へと、多少退屈だが幸福であることに間違いない親子四人の家庭へと戻ったほうがいい、そう思

う反面、寄り道する機会は今夜しかないのだとも思える。

こうもぼつかりひと晩が空く機会は今訪れないだろうし、一旦東京へ戻れば、わざわざ妻に嘘をついてまで北陸へ向かうとする気持ちはなくなるだろう。あの女のことだけではいい。妻の美冴^{みさ}が大きな座を占めている家庭の柵の外で、他の女を探すこともなくなってしまいそうな気がする。今夜が生涯で最後のチャンスになるかもしれない。四十六歳という年齢が、この時の藤家にはひどく半端な、不安定なものに思われた。東京と金沢、妻とあの女、家庭の惰性に似た幸福とひと晩だけの刺激的な毒をもった幸福、そのどちらへ傾いても不思議ではない、半端な崖にぼんやりと突っ立っている気がした。

発車のベルが鳴った。

意志とは関係なく、そのベル音につかまれぐいと引つ張られたように席を立った。入口に立っていた客を押し除けるようにしてホームに降り、階段を駆けのぼっていた。乗り換え口で切符を買い換えるのに時間がかかり、陸橋になった通路を走りだした時は、北陸本線のホームすでに発車のベルが鳴り響いていた。

どうやって階段を駆けおりたかは憶えていない。最後の一段を踏んだ時、ベル音がとぎれた。

一番近い乗降口に飛びこんだ時、閉まりかけたドアで肩をしたたかに打った。

閉まり直したドアに崩れるように寄りかかり、大きな息を吐きだし、藤家は苦笑いした。こんなに夢中で走ったことはもう何年もなかった。肩の鈍い痛みを心臓の激しい動悸が鋭い針でつつき続けている。それが、だが、藤家には不思議に心地よかった。走りだしさえすれば、自分の中の血はまだこうも激しく流れるのである。手で拭った額の汗は、窓越しの陽にまだ若い脂をきら

めかせている。それに列車はもう金沢へと向かつて走りだしている。

もう迷う必要もない。後は金沢の町が、十年前のあの一夜がどこまで自分を手繰りよせてくれるかだけだった。

動悸と肩の痛みが鎮まるのを待つて、車両を覗いた。自由席の切符しか買えなかったが、グリーン車なら空席があるかもしれないと思った。覗いたのはちょうどグリーン車だったが、通りかかった車掌に尋ねると、指定席は全部満席で、自由席のほうも混雑していると言う。

「ただ途中で空く席があるでしょうから、ちよつと待つていてください」

そう言われ、仕方なく連結部に戻り、ドアに寄りかかった。車窓を平凡な田畑の風景が流れている。同じ米原近辺でも、新幹線の車窓から見ると、この北陸本線の列車から見ると、田畑もどことなく鄙ひなびて見え、陽の光も寂れて見える。

北陸トンネルの長い闇に突入するまで、藤家はその場に立ち続けていた。トンネルをやつと脱けだしたと思うと、景色が一変した。陽光が今のトンネルの闇に吸いとられたかのように消え果て、不意に暮色が降りてきたような印象だった。光だけでなく色も消え、それまでの田園風景のパステル画が、淡墨の水墨画に変わった。視線が圧迫感を感じるのは鉛色に重く垂れこめた雪雲と線路のすぐ近くまで迫った山肌のせいだった。

風景から色を奪っている雪にもう北陸の色があった。

時々車窓に雪片が白く舞った。本当に降っているのか、山肌や木々をうつすらと覆っている雪が風に巻きあげられているだけなのか、わからなかった。

今度は間違いなく本物の雪だが、それでも白い乱舞は一瞬の幻のように見える。じつと見てい

ると白いうずが視線ごと藤家の心まで巻きこみ、遠い思い出の闇へと引きずりこんでいく気がする。あの晩の軒灯が藤家の目ににじんでくる。女の名は思いだせないが、店の硝子戸の上に吊るされていた軒灯の「竜田屋」という文字だけは憶えている。降りしきる雪に白く濡れていたあの軒灯は、今夜十年ぶりの男をどこまで導いてくれるだろう――。

そんなことを考えていた時、

「あのおう、よかつたら私の隣りの席、空いてますけど……」

声がかかった。ふり向くと若い女が立っていた。

「さっき車掌さんに尋ねてらしたでしょう？ 金沢までの席……私の隣りが空いてますから」

それだけを言つて藤家の返事も待たずに女はグリーン車のドアに消えた。まだ目に雪がしみて残っていたせいか、突然だった女は現実感が薄かったが、グリーン車を覗くと、前から三つめの窓際の席に確かに座っている。

藤家が近づくと、女は隣りの席からコートを取り、自分の膝にかけながら、「どうぞ」と言つた。藤家が礼を言つて遠慮がちに座ると、女は切符をさしだしてきた。特急券と藤家が座つた席の指定券である。理由がわからないまま藤家が財布をとりだしそのぶんの金額を払おうとすると、「いいんです、どのみち無駄になるところでしたから」

女はそう言い、唇の端を少しだけよじつて笑つた。そういう皮肉な笑い方の似合う薄い唇をしている。さつき一瞬感じとつた白さは目近で見ると化粧のせいだとわかつた。ただ顔だけは悪くない。鼻すじなどぼつそりときれいに通っているのだが、その細さと唇の薄さとに、どこか冷たい印象がある。化粧が強すぎるせいかもしれない。

「連れの者が、急用を思いだして名古屋で降りてしまつて……。私が乗車券を預かつてることに気づいた時はもう列車が動きだしてしまつたものですから」

「だつたら困つてるでしょう、その連れの人」

女は「ええ」と曖昧な答え方をした。

「東京から見えたんですか」

それにはただ小さく頷いただけで、女はそれ以上の質問を、視線を窓へと投げ、冷たい横顔で拒む様子だつた。髪は後ろに巻きあげ灰色のレースのリボンを結んでいる。耳につけた大粒の真珠や淡い水色のスーツの胸もとに飾られた銀灰色の造花や、服装には華やかに匂いたつものがある。

花は胸の造花だけではなかつた。膝にかけたコートの襟もとから本物の花が覗いている。

花束らしい。

そうと認めて、藤家はやつと気づいた。女の髪型や化粧、服装は新婚旅行の新婦の典型的なものである。ただ藤家が、すぐにそれに気づかなかつたのは、新婚旅行中の新婦に一番必要なもの、新郎が欠けていたからだつた。

その想像が当たつていれば女はたった一人で新婚旅行をしていることになる。

「金沢へは、お仕事ですか」

女は藤家が花束を不審そうに見ている目に気づいたらしい、注意を逸らすようにそんなことを尋ねてきた。